

保存版

町雑誌

特集

荒川

川

PART1



読者
プレゼント

荒川水系の水を原料とする秩父の銘酒
「武甲正宗」ワールドカップサッカー記念ボトル
3名様にプレゼント！

価格
300円

■新連載■

「縁 + ネットワーク」¹

新・千住²人スケッチ¹

千住DAISUKI¹

行きつけの店¹

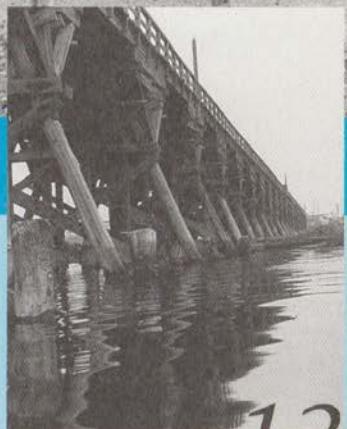
■連載■

千住蔵の町⁹

千住に似た町²

千住20sの風景⁴

千住



VOL.13
MachiZasshi Senju

特集 荒川

川 PART1

荒川は人がつくった川である。江戸時代、この川はなかった。明治時代にもなかつた。

明治40年の夏の終わり、大雨が続き、隅田川^{隅田川はあふれ、町々はどっぷり水に浸かった。}はあふれ、町々はどっぷり水に浸かった。

明治43年には8月の初旬から長雨が始まり、隅田川は荒れ狂い、多くの命や家を奪つた。

千住の町々も泥海となつた。

明治40年の洪水。奥に見えるのが長円寺（横山佐吉氏蔵）

※ 千住あたりでは、現在の隅田川は当時荒川と呼ばれていた。
竣工は昭和5年。

明治44年、調査が始まった。
もう一本川を掘り
荒ぶる川の水を2つに分けるために。
もう一本の川は荒川放水路と呼ばれ、
大正2年、当時の日本でも有数の大工事が始まつた。そして10年余。
大正13年6月20日、千住新橋が完成し、
水は流れ始めた。



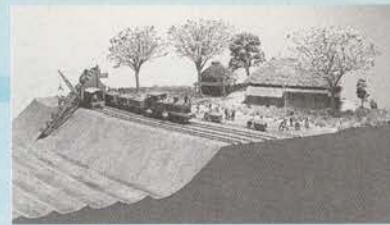
明治43年の大水時の千住



荒川放水路工事の様子

■ 目次 ■

特集 荒川Part1	1
昔荒川がなかつた頃	2
反対&活気	4
荒川の中に暮らしがあった	6
荒川はみんなの心のふるさと	8
荒川はみんなの遊び場だ	10
千住荒川土手をもっと楽しむためにくびソト&知恵袋	12
いつものように土手に腰を下ろしてく画家長谷川利行	13
荒川特集番外編	14
連載 千住藏の町⑨	16
連載 縁+ネットワーク①	18
連載 千住DAISUKI<柳原編>①	20
連載 新・千住 ² 人スケッチ①	21
連載 千住20sの風景④	22
連載 行きつけの店①	24
連載 千住に似た町②	26
お願いなど	28
千住にひとこと	28
裏表紙	



荒川放水路の工事模型（足立区立郷土博物館内）

昔 荒川がなかった頃

明治44年の千住



荒川で区切られることなく、旧街道は北へ続き、その両側に町が広がっていた。

二丁目		一丁目		中組		大字字	
東中沼	四丁田	大塚	牛田	東	(二丁目)	西中沼	堤内西
堤外西	金佛	西川田	丁張	大塚	牛田	堤外東	橋戸
大塚	牛田	西川田	丁張	牛田	東	堤外牛田	堤外西
五丁目		四丁目		三丁目		大字字	
西中沼	川田	元宿	金佛	西川田	丁張	東中沼	(三丁目)
大塚	西川田	金佛	西川田	大塚	東	大塚	東
牛田	元宿	金佛	元宿	牛田	(四丁目)	牛田	(三丁目)
西中沼	丁張	東中沼	丁張	大塚	西中沼	西中沼	西
大塚	東中沼	四丁田	大塚	西	元宿	堤外西	金佛
牛田	四丁田	大塚	西	西	金佛	堤外牛田	元宿
西中沼	槐戸	丁張	東中沼	西	西中沼	西中沼	西

(復刻東京十五区・近傍34町村 ③2 南足立郡千住町・北豊島郡南千住町全図／人文社より)

「江戸を守る」から「東京を守る」へ

「河川を制する」ために、江戸の昔から人々は働いてきた。そもそも関東平野を農業に適した肥沃な土地にするために、時の施政者は河川を何回も付け替え川の流れを変えた。さらに江戸の中心に水害が及ばないように、日本堤と墨田堤を漏斗の口のように設けた。その結果、千住より上流は大雨の度に水が氾濫し洪水に泣かされてきた。

やがて明治時代、関東平野に住む人がどんどん増え、土地の利用法も農業から商業へと移つていった。そこへ起きた明治43年の大洪水、寛保2年の洪水以外決壊したことのない墨田堤も一部決壊し、東京はまさに水没になってしまった。そして始まつた国を挙げての一大事業が、荒川の排水用の川＝荒川放水路の計画だつたのだ。

●もしかしたら千住は半分水没していた!?

荒川の排水用の川＝荒川放水路を作ることは決まつたが、そのルートはなかなか決まらなかつた。議会の資料等からみると、荒川放水路のルート案には大きくわけて4つ（図参照）あつたらしい。①と②は計画的に無理があり、残るは③と④どちらも千住がネックである。③の案では現在の隅田川の北側、掃部宿、墨堤通り一帯が川となり千住の南側がごつそり水路に沈むことになる。千住住民は声高に反対を叫んだ。

荒川改修工事により千住河原町・橋戸町、歴史ある青物市場も移転、これは正に千住町の衰亡に他ならない、何とか別

のルートを考え欲しいと千住町民有志が陳情書を提出、まだ決まつたことでないから心配するなど書記官が気休めの挨拶をしたという記事が当時の新聞に載つている。結局、

●300万人が働いた

放水路の工事では、まず人力や馬を使って川岸にあたる部分を平らにならし、その上に象のようない形をしたエキスカと呼ばれる掘削機と土運搬のためのトロッコ用のレールを敷いた。掘られた土は堤防を作るために使つた。最後に、出来上がった水路に水を引き、浚渫船を使ってさら

に深く掘り下げた。

工事現場では先の用地買収によって農地を奪われた農民や近隣の農家の人が農閑期の日銭を稼ぎに来たりした。放水路の周りにいくつもできた飯場では、埼玉や千葉、群馬や茨城などの地方からきた出稼ぎの人々が住み込んで働いていた。また日本が朝鮮を併合した後、朝鮮から日本へ仕事を求めて来た人も多かつたという。彼等の中には、後の関東大震災でのマによって起つた朝鮮人虐殺の犠牲者となつた人もおり、荒川の悲しい記憶となつてゐる。のべ約300万人の人が働いた。

●工事中の荒川は舟で渡つた

付近に住む子供達にとって、放水路の工事現場は格好の遊び場だった。一日の作業が終わつた後で隠れてエキスカやトロッコに乗つたり、ところどころにできた池のような放水路の水たまりに住みついた生き物をとつたり泳いだりして遊んだ。ただ機械振りの爪のあるところにはまると這い上がり、深いところでおぼれてしまふ子どももいた。

放水路をまたいでの通行は数ヵ所しかなく、一番最後に千住新橋が架けられた。その間の交通は舟を浮かべて繋いだ浮橋などで代用したそうだ。こうして大正13(1924)年、放水路全体に水を通す通水式がおこなわれ、昭和5(1930)年、20年にもわたる大工事の末、荒川放水路は完成した。

反対

明治44年5月19日の東京朝日新聞より。千住に限らず、流域の町々から多くの陳情がなされた。



晩年、荒川放水路をたずねた際のスナップ→



世界に名を残す技術者 青山 士

荒川放水路という一大国家的プロジェクトの最高責任者、青山士は、日本の土木史に残る偉大な技術者である。帝大卒業後自費でパナマに渡り、パナマ運河工事にただ一人の日本人として働き土木技術を学ぶ。帰国後内務省に就職し、その技術をおしみなく投入してできたのが荒川放水路だ。

日本人として働き土木技術を学ぶ。帰国後内務省に就職し、その技術をおしみなく投入してできたのが荒川放水路だ。脚にゲートルを巻き、作業着姿で腰に手ぬぐいをぶらさげ、大正4年に結婚するまで千住の日本人として働き土木技術を学ぶ。帰国後内務省に就職し、その技術をおしみなく投入してできたのが荒川放水路だ。日本人として働き土木技術を学ぶ。帰国後内務省に就職し、その技術をおしみなく投入してできたのが荒川放水路だ。

日本人として働き土木技術を

借家に住んでいたといだ。当時の日本

の土木技術では実験段階だった鉄筋コンクリートを導入した岩淵水門は、関東大震災にも堪え、今も「赤水門」として親しまれている。また

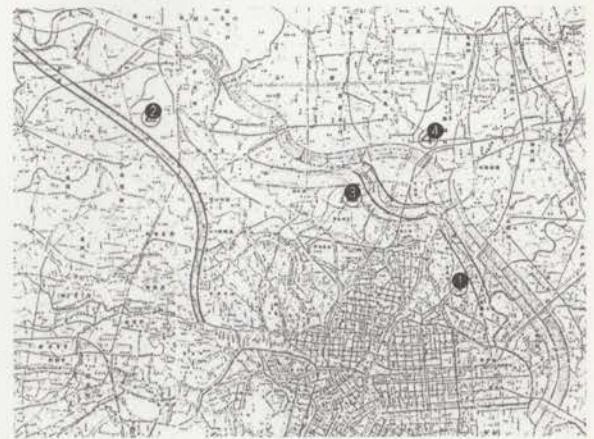
現場に出て働くことを好み、ある年の暮れには作業員全員を招待してテンブリ料理大会を催すなど、人間味ある技術者だつたようだ。

岩淵水門近くの荒川知水資料館に入

り、最大の功労者たる自分の名を

入れず、工事に携わつた人と犠牲になつた人への感謝の意だけが記されている。その控え目で実直な姿勢は、まさに青山士の人柄を表している。

(文/K)



●放水路のなかに人々は暮らしていた

日光街道の宿場町として発展し、当時すでにかなりの町並みを形成していた千住は、南側の発展していく地域でなく、家並がある程度途絶える北側を迂回して荒川放水路が作られることとなつた。現在の荒川を地図に見ると、確かに千住の町を迂回してわざわざ長い水路を掘つた様子が分かる。水路にかかるないギリギリの場所に千住代々の名家である名倉医院が位置していることから、「名倉を避けて掘られた」という風説は今も言い伝えられる。

放水路によって生活が分断された場所もあった。親戚を頼つて移転した人、移転先へ自分の家を曳き家する人、また農地を失つた人の中には工事現場で働くために放水路予定地近辺に引越して来た人などもいた。

放水路によつて生活が分断された場所もあった。葛飾の下千葉にあつたが不便なため、昭和になつて足立区に編入され現在の柳原となつた。大正2(1913)年1月10日より始まつた一般的な土地買収は大正6年までかかつた。買取された用地代を銀行に預けた人もいたが、その後の不況で銀行が倒産、預けたお金をすべてなくしてしまつた人もいたようである。

全長22km、幅500mの荒川放水路を作るにあたつて、買取された土地は1098町歩（約1088ha）、移転した家の数はなんと1300戸にも及んだ。千住の牛田に土地收回用130戸にも及んだ。千住の牛田に土地收回用

事務所が開かれ、買収価格は、一反（約1000平方メー

トル）当たり住地が300円、水田が170円、畠が130円、その他が100円だったそうである。親戚を頼つて移転

した人、移転先へ自分の家を曳き家する人、また農

地を失つた人の中には工事現場で働くために放水路

予定地近辺に引越して来た人などもいた。

荒川の土手を、風を感じながらゆっくりと散歩をする。広々としたその風景は日頃のばたばたした日常から、ふと心を解き放ってくれる。そんなとき、かつてここに暮らした多くの人たちがいたことを想像してみると、穏やかな川の流れの中から、また別の景色が見えてくるような気がする。

放水路を作るために住み慣れた土地を立ちのいた人々は130戸にのぼったという。その中には、「曳き家」という手法を使って、家をそのまま移動した人もいた。引き屋という専門の職人の手により、土台を組んで家揚げをし、通る道筋をトロッコでならし、コロと呼ばれた丸太を並べその上を曳いていったという。現在のような重機のなかつた当時、多くの人手と時間をかけて行われた大変な作業だった。そうして移された建物にはほとんど狂いがない。今でも当時の家に暮らす人たちがいる。それらに大切に住まう暮らしを見ると、先祖の家に対する深い愛着と、その思いを受け継いでいる貴重さを感じずにはいられない。

「川底にいた我々はもとより、限りない犠牲と引き換えにできた荒川だが、私たちが安心して住めるようになったのは、この川のおかげ。

この川が人の手を使って掘られ、多くの犠牲を払つたことを忘れてはいけない」と生前の富澤孝之さんが語っている。

荒川の中に暮らしがあつた



墨田区墨田 鈴木家

曳き家の準備をしている当時の貴重な写真(左)の残る鈴木家は、江戸時代安政の大地震の後に建てられたというから、築150年ほどになる。かつては、現在の堀切駅近くの高速道路の下にあり、放水路の西に残った自分の土地に移った。コロで曳いてくる際に瓦が落ちてしまい、移築してからふき替えたのだそう。「マンションに建て替えようと思ったこともあったけど、長いことこの家で暮らしているから、愛着がたっぷりあってね」と語る鈴木徳雄さんは大正2年生まれ。家と過ごした時間は90年近くになる。

柳原 富澤家

曳き家をして柳原に残る富澤家は、もともと現在の堀切橋の中ほどにあった。その建物は江戸時代に浅草橋場にあった旗本の下屋敷を移築したもので、築150年ほどだという。江戸幕府の時代には船便業を営んでおり、このあたりの年貢米を綾瀬川から隅田川を通じ、蔵前の幕府の米蔵まで運んでいた。



千住竜田町 宇田川家

おかしら鈴木氏(左参照)とともに元宿から移転した21戸のうち曳き家をしてきた宇田川家の謹慎な建物が、現在も竜田町に残る。後年、宇田川元造さんが地域の歴史研究家とともに作った元宿の地図からは、川底に見えなくなってしまったふるさとへの郷愁の思いが偲ばれる。

日ノ出町 大塚家

巨大団地のすぐ近くに凛とした佇まいを残す大塚家は、大正7年に現在の地に引っ越してきた。明治20年に建てられた当時は藁葺き屋根だったという2階建ての母家のほか、火の見櫓のある珍しい別棟も曳き家をしてきた当時のものだという。「あんな大きな川を手堀りで掘ったんだからすごいよねえ」と話す大塚甚三さんと子さん夫妻は昭和2年生まれで、当時はまだ生まれていなかったが、壁は一度落とした状態でコロで曳いてきたと聞いているとのこと。放水路ができる以前はお寺の敷地だったという大塚家の庭には、今でも当時の石があり、その名残を残している。



千住河原町 岡本家の蔵

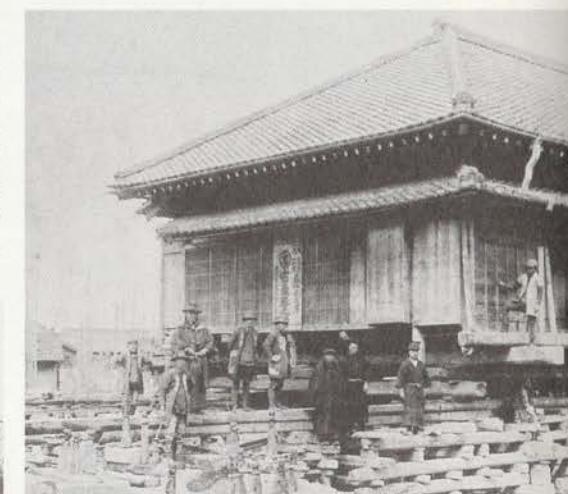
江戸時代に両替商を営んでいた岡本家は明治時代の後半、青果物問屋に転向した。明治15年生まれの岡本行央氏のおばあ様は、2度ほど火事にあった経験から、蔵が欲しいと思ってきたところ、放水路を造る際に壊されることになった蔵を譲り受けたという。2泊3日かけて運んだその蔵は、昼間は道のわきへ置いて邪魔にならないようにし、夜間に移動をしたのだそうだ。



元宿神社の感旧碑と鈴木家

住み慣れた土地を離れざるをえなかった当時の人たちの無念の思いが偲ばれる碑が、千住元町の元宿神社にある。この碑石は、かつて荒川の中にあった元宿耕地に住み「おかしら」と呼ばれていた鈴木興吉さんの手により大正5年に建立されたものだ。一族と近隣の21戸が元宿(現在の西新井橋の下あたり)に心を残して去った。碑には「武田氏の家臣であった先祖は、甲府から元宿を開墾し移り住み、400年余の間どんなにひどい飢饉や水害にあっても土地を守り続けてきた。しかし大正元年荒川改修工事のため、立ち退きを命じられ一族は四散することとなった。この地を去るにあたり、愛慕の念禁じ得ず、その一族の歴史と思いを後世に残す」という旨が記されている。境内にひっそりと建つこの碑の前に立つと、当時の人々の心もそこに静かに残っていると感じることができる。

(取材・文/KN)



白い水泳帽に墨汁で丸を

ワード、キヤー、と賑やかに喚声をあげ、水しぶきではしゃぎ回る子供、それを千住新橋の上に足を止めて見物する黒山の人。この風景が千住に夏到来をつげる風物詩だ。四号線（日光街）



昭和初期に名倉医院に書生として入り、後に接骨師となった鳥居良夫さん（矢印）は、当時荒川で小学生に水泳を教えていた。

道）を千住新橋を中心に草加方面に向かって両側に水練場があった。左側に修武館と練武館、右側に講武館と正柔会とあり、昭和の初めから昭和16年ごろまでが最盛期だったと記憶している。私が通ったのは講武館で、夏休みの来るのが楽しみだった。手拭いを二つ折りにして紐を通すだけの簡単な袋の中に、弁当、ふんどし、その他のものを入れて通った。当時はまだ水泳パンツが普及していない時代だった。

初心者がまず習うのが、ふんどしの締め方。当時習ったふんどしが、今日の祭りの若者のふんどしに役立つとは思わなかった。「褲を締めてかかる」（決心をかたくし、覚悟して着手すること／広辞苑）というように、ふんどしについての説が数々あったが、水辺で気持ちを引き締めた私たちは実感としてよくわかる。初心者は赤褲、上級者は黒褲だった。

本誌でたびたび千住の昔を語っている郷土写真家の石坂満さん（80歳）。千住生まれの千住育ちだ。荒川ビギンセンター（12ページ参照）には石坂さんが昔から撮ってきた荒川の風景が数々が飾られている。

馬船を浮かべ飛込台の櫓を組立てた。また小型の伝馬船を20m位の幅に置き、20m×20mの川幅の即席ブールみたいなものが仕立ててあつた。初心者は白い水泳帽、上級者は黒い帽子が普及していない時代だった。

講師は赤帽で、これは各水練場とも共通していった。初心者は川岸から5m位のところに丸太棒で柵をつくり、その中で遊んでいた。時折講師の先生が長さ10mの柵の横棒につかまらせて、手を伸ばさせ足をバタバタさせる基本動作を教えた。子供たちも20日ぐらいい経つと大きさ（初心者の泳ぎ方）などを自然に覚えた。両脇の小型伝馬船の間、20mが泳げると、白い帽子のてっぺんに墨汁で丸をつけてもらった。これが初級合格の印、通称三寸だ。千住新橋は河口から遠くないため、川幅や水の深さが変わり面白かった。特にモーターボートが通過すると子供たちは一斉に川に飛び込んで波のうねり乗りを楽しんだ。当時は学校にブールではなく、皆自分で川に行き自然に泳ぐのを覚えたものだ。

ただ、川は危険もあり溺れる犠牲者も多かつた。戦後興期に入ると河川の汚染がひどくなり、橋を渡る時は鼻をつまむほどに臭く、水质汚濁が社会問題に発展したのもつい最近のことだ。その後下水の普及が川の汚れをくいとめ、現在の状態になった。

（文／石坂満）

荒川はみんなの心のふるうこと

臭い川面に浸かって撮った

「この頃が荒川の一一番汚いとき。川の真ん中まで行けば大丈夫だけど、川岸だと重油がべったりくつついちゃう。匂いもすごかつたんだよ」と語るのは大塚甚三さん。昭和34年、ちょうど高度成長期、工場が outputs 汚水などで荒川はそうとう汚かった。でもどうしても正面から撮りたくて、息子さんにボートを漕いでもらつて川の真ん中まで行き、ボートの上では揺れるからと川に



千住新橋の原節子にぐっときた

大塚さんにとってのもうひとつ荒川といえは、映画『ためらふ勿れ若人よ』が忘れられないという。この映画は昭和10年の作品。映画の役名「若節ちゃん」から芸名がつけられた女優・原節子のデビュー作でもある。日本ではじめての学園もので、学校のシーンは足立中学で撮られた。オール千住ロケだったため、みんなで口ヶを見に行つた。「ラストシーンがね、千住新橋なの。橋の上からセーラー服を着た原節子が手を振つて。下には船に乗つて別れていく滝口新太郎が詰めえりで学生帽をかぶついてね。もうぐつときちやうシーンだよ」。しかも大塚

さんがこの映画を観たのが、当時千住新橋のた

浸かって撮った貴重な写真（上）だ。堀切橋は自転車2台がすれ違える位の幅で、船が橋の下を通るたびに揺れたそう。腐らないように松材で作られ、上流側には台風などで木が流れてしまふときには直接あたらないよう流木よけがしつらえてあった。台風の時は、荒川のこうごうという流れの音が日ノ出町の自宅にいても聞こえたという。キヤサリン台風には利根川の栗橋付近の土手が決壊したと聞いて、あわてて荒川は大丈夫かと見に行つたが、土手すれすれまで水がきていてヒヤヒヤしたそうだ。

また、戦争中の思い出として荒川土手に陸軍の高射砲の陣地があつたことも話してください。兵隊さんがたくさんいて毎日訓練をしていました。

やかんを持つて荒川へ

荒川放水路工事は国を挙げての大事業。通える近隣の人たちだけでなく、全国から働き手としてたくさんの人がやってきた。それが縁で千住に移り住んできた人たちもいる。

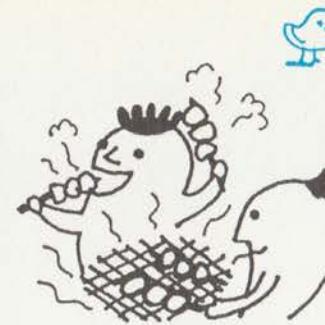
千住5丁目の若林けいさん（故人）も、千住に住むきっかけが荒川だった。生まれは千葉の笠川。父親が荒川放水路の土岸工事をやつていたため、4つから5つの時に千住に引っ越してきた。母親も掘削した土を入れて運ぶトロッコを押して働いていた。当時働いていた人は男女が半々くらいだった。「おつかさんもおとつあんも工事現場で働いていた。子どもは8人いて、ごはんの時間にはあそこまで鉄を持っていた。お鉢へお母さんが作つたおかずを入れて、やかんへ水をいっぱい入れて」。一日働いて腕のいい土工なら日当が五十銭。この現金收入はけつこう魅力的だったようだ。荒川放水路の工事のために方々に飯場もできたという。



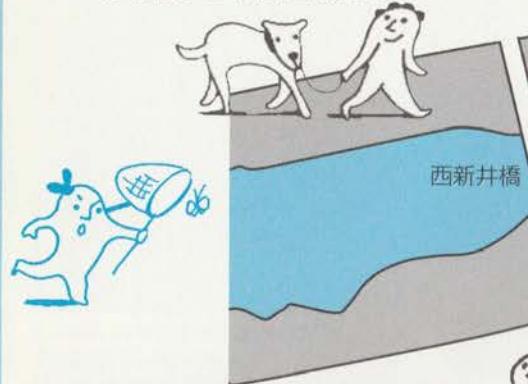
生前の若林さん（大正2年生まれ）。千住5丁目の蔵を住まいとし、千住をこよなく愛されたが、子どものころ通つた荒川には格別な思い入れがあったよう。

バーベキュー

専用の場所があるわけではないが土手で人気の遊び。ただ、直火は禁止のほか、水道に排水を流したり、ゴミを放置するのはいただけない。マナーを守って。七輪で焼き魚なんかもオススメ。



荒川犬散歩。コースは千差万別です。



河川敷の運動場では野外スポーツなら何でも楽しめる。SEALSの少年たちは水辺が大好き。

●問／足立区生涯学習振興公社 03-5686-2503

お化け煙突 跡地

野球とサッカーの練習場があり、2001年頃は、FC東京も練習場として使用していました。



11

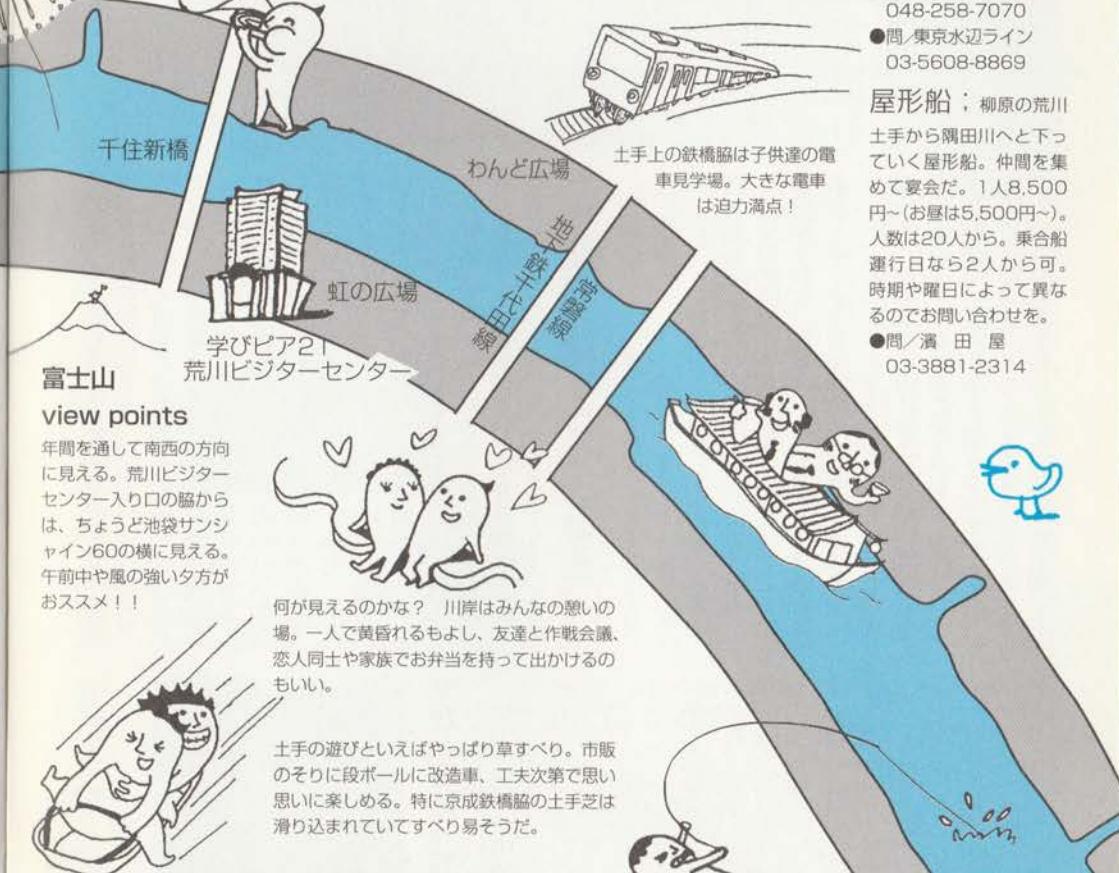
バードウォッチング

千住を含む荒川と隅田川に挟まれた地域には54種類の野鳥が確認されて、土手や川岸で目をこらして観ると色々な鳥たちに会うことができる。足立区荒川ビジターセンターで観察の仕方も教えてくれるし、双眼鏡も貸してくれる。●問／足立区荒川ビジターセンター (P-12参照)



荒川はみんなの遊び場だ

太鼓の練習やプラスバンドの練習。一人でも大勢でも広い河川敷では思いっきり音を出せます。



保育園のお散歩コースにもなっている土手。お花片手にいポーズ。



釣り

荒川ではいろいろな魚が釣れる。ハゼ、コイ、ブナ、ウナギ、ボラ、セイゴ、モツゴ、テナガエビなどなど。台風の後には珍しいものも釣れるらしく、スズキやエイまで釣れたらしい。魚にもよるが天ぷらや焼き魚で食べることもできる。

10

遊覧船：荒川をゆく
水上バス。コースは上流から東京湾まで下ったり、荒川から隅田川を巡って戻ってきたりと様々。
●問／海洋商船（株） 048-258-7070
●問／東京水辺ライン 03-5608-8869

屋形船：柳原の荒川
土手から隅田川へと下っていく屋形船。仲間を集めて宴会だ。1人8,500円～(お昼は5,500円～)。人数は20人から。乗合船運行日なら2人から可。時期や曜日によって異なるのでお問い合わせを。
●問／濱田屋 03-3881-2314



(取材・文／FJ)



荒川風景（昭和14年）府中市美術館蔵

お化け煙突しきものが描かれたこの印象的な絵は、亡くなる前年の作である。画題の「荒川」は現在の隅田川のことではないかと思われるが、千住の水辺の風景が利行にとってなじみ深いものであったことは確かである。

いつものように土手に腰を下ろして

すぐ眼の前の赤煉瓦造りの千住火力発電所の、巨大な四本煙突から今日は煙りが出ていない（この煙突は、近所の人からお化け煙突と呼ばれていた。見る所によって二本になつたり、三本になつたりするからである）彼は、川風に吹かれながら荒川放水路の高い堤防まで歩き、秋草の上に、いつものやうに腰を下した。

白い太陽が雲の切れ目から洩れて来た。放水路は、水が涸れて、葦の葉が広い川原の空間を青々と無感動に埋めている。

長谷川利行の晩年を描いた小説「放水路落日」のワンシーンである。放浪の画家、日本のゴッホとも呼ばれる長谷川利行は、30代で上京してから49歳でその生涯を終えるまでの大半を日暮里や山谷に暮らした。荒川放水路は彼の伝記的小説の書名にもなるほど彼の日常であり、千住や荒川土手にさすらい、川面に触れ、心にとまった人や風景を描いた。大胆な筆遣いながら町や人の心の深底を書き出すよう

絵の数々は今も多く人の心をとらえて離さない。ポツン、ポツンと詩のような喋り方をし、普段は人と目を合わせて話すこともままならないが、ひとたび絵の対象を捕らえると、その目は鋭さを増し、速写的に描き上げ、スケッチブックがなければ煙草の箱の裏にも描いたという利行。

当時の利行にとっての荒川は、現代の我々が持つ「荒川」の印象とかなり異なるように思える。彼の「荒川放水路」（昭和13年）という詩には「バットの強きタバコの臭さ」「放水路で洗濯する」「煙突の白い煙、黒い煙」「青草に丸裸の少年がねころんで居る」「バクテリヤの繁殖」といった、今の荒川を思えば似つかわしくないようにも思える言葉が並んでいる。

川の流れは、その周りで生活する人々の喜びや悲しみ、社会の矛盾をつつみ、呑みこんでゆく。長谷川利行の人生もどこかそれに通じるものがある。短い画家人生の中で人々と不器用にしかし愛情深くつきあい、東京の裏側から町の美しさと哀しさを見つめ、ただただ描き続けたのである。

荒川放水路は、永井荷風をはじめ様々な文学・映像作品に登場してきた（千住 vol.6～7参照）。現代に至っても、金八先生や告白の土手（TBS）、各種CMの背景としてたびたび目につくが、画家長谷川利行の愛した荒川放水路は、我々に荒川の違う一面を見せてくれる。



～千住荒川土手をもっと楽しむために～

千住荒川土手の主な年中イベント

1月 さわやか全日本一輪車駅伝大会
一輪車駅伝はほかでは見られないイベント。700名を超える参加者あり。●問3881-5988 足立区一輪車連盟

3月 荒川交流フェア
荒川河川敷に6つの会場ができる（うち2つが千住）、マラソンあり、縁日あり、ステージありで、春の荒川を楽しめる。●問5571-5050 荒川交流フェア2002事務局

7月 下旬の木曜日（2002年は7月25日）
足立の花火大会
約1万発の花火が上がる。土手に寝ころんで空いっぱいの花火を楽しめる。●問3880-5853 足立区観光協会

9月 15日
タートルマラソン全国大会兼バリアフリータートルマラソン大会
健康と親睦を目的として、空の広い荒川土手を走る。障害のある人と健常者が一緒に走る日本で初めてのマラソン。●問3363-5331 (社)日本タートル協会



秋 荒川クリーンエイド
荒川流域の学校や企業、サークルなどが呼びかけ・主催団体となって毎年行われる、みんなで川をきれいにする運動。2001年秋も、のべ38回にわたり約8000人が参加。●問3654-7240 荒川クリーンエイド・フォーラム事務局

10月 上旬の土日
あだち区民まつり (A-Festa)
たくさんの模擬店が開かれ、ステージでは各種イベントもあるので、親子で1日楽しめる。●問3880-5865 足立区産業経済部産業振興課商業係

■荒川を知るための知恵袋■

あらかわ学会

荒川に思いを寄せる人たちが参加する市民団体。一般の人が参加できる学習会・観察会なども随時開催している。事務局は荒川知水資料館の3階にある。●問03-3598-12133

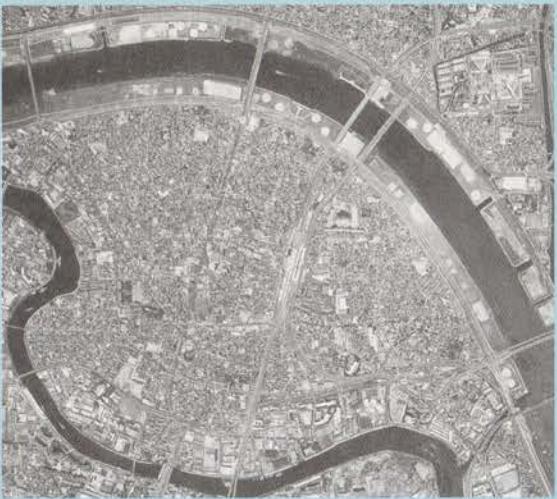
荒川知水資料館 (amoia)

荒川の歴史と現在を研究する市民団体。一般の人が参加できる学習会・観察会なども随時開催している。事務局は荒川知水資料館の3階にある。●問03-3902-12271

足立区荒川ビジターセンター

荒川に親しむ暮らしを目指して荒川あるきの日（月3回）、自然観察やクラブなどのイベントを開催ほか情報提供を行っている。足立区中央図書館と同じ「アーバンアクト」の4階にあり、スタッフが親切に対応してくれる。●問03-5813-13753
入館料無料／9時～21時半（スタッフは5時迄）／休館日月1回不定休、年末年始

空の広い荒川土手は、今も昔も最高の遊び場。スケールの大きな水辺の空間を、もっともっと楽しもう！



荒川特集番外編

昭和24年の空中写真(右)を見ると荒川土手に耕地がつくられていることがわかる。目を凝らして、平成12年のもの(左)と比べて見ると面白い。



読者プレゼント

荒川水系の水を原料とする秩父の銘酒

「武甲正宗」

ワールドカップサッカー記念ボトル

3名様にプレゼント！

江戸中期から秩父の酒を作り続ける武甲酒造がつくる限定ボトルです。荒川水系の良質の地下水を使ってできる小さな蔵の美味しい手造り酒は、全国新酒鑑評会でたびたび金賞を受賞している実力派。ワールドカップ&町雑誌千住『荒川』特集の記念プレゼントです！

武甲酒造のホームページは<http://www.bukou.co.jp/>

【応募方法】官製はがきに、住所・氏名・年齢・電話番号
町雑誌千住13号の感想を書いて、下記までお送りください。
当選発表は発送をもって変えさせていただきます。

●2002年6月5日締切（当日消印有効）。

120-0034 足立区千住3-52 町雑誌千住編集室

武甲正宗サッカーボトルプレゼント係





生まれ変わった岡田家の蔵



改装途中で大発見。それまでは土台に当たる腰巻きが耐火煉瓦製で、その上の建物は木骨土蔵造りだとばかり思っていたのが、屋根まで煉瓦が葺かれている、木骨煉瓦積み構造と判明。とてもしつかりした造りに改めてご先祖の蔵に対する思いを実感しました。それだけ丈夫な建物で重量があり、地盤の関係でやや傾いていた蔵でしたが、土台も補強し現況を維持できるようにしています。こうした動きは、私達の活動にとても勇気を与えてくれますが、一方で個人の所有物だからこそ保存修復の限界が見えてきます。千住を特徴づけている町の宝だし、なんとか行政からも援助の手だてがないものかと思われて仕方ありません。

今回お知らせした両方の蔵とも、内部は非公開ですが、路地から遠望できます。ぜひ、元気になつた千住の蔵を見て下さい。

がんばる千住の蔵



再生前

千住はこここの所、大きく様変わりしつつあります。駅前にあった大谷石の蔵と煉瓦蔵は、再開発事業の進展により取り壊され、新たに大きな建物がつくられています。その一方で、2棟の蔵が元気を回復しました。

文・写真／荒居康明



ウォーカーリーポイントにもなっている中川園の蔵

もう一つ、昨年の夏、千住二丁目の岡田さんから「家にある明治36年の蔵を壊したいのだけれど」という、切実な電話がかかってきました。取る物も取りあえず伺うと、かなり氣落ちされている。お話では戦前からの古いセルロイドフィルムが、天候不順で高温になった室内で自然発火し小火を出してしまい、ご近所にも迷惑をかけた上、大切な思い出が失われてしまい、とてもいたたまれないとの事。

ご自分のせいではないし、誰も悪くないのとてても責任を感じ、いっそ蔵を壊してしまおうというお話で、びっくり仰天。蔵は今の生活からはやつかない物。かといって簡単に壊せない…。

蔵は日本が世界に誇れる建築様式であること、しかも現在では専門職の不足と膨大な経費のため新築が難しい点を強調しながらお話を重ねてゆくと、ご自分のご先祖が残した貴重な文化遺産を守つて行く決心をして下さった。それからの岡田さんはすこかつたですよ。五代出入り

している大工の棟梁と連絡し、ご自分でも模型を作つて研究し、細部に渡るまで納得のいくように再生されました。ある時は、折れ釘が少ないと探し回り、铸物屋で100本単位でないとできないと断られる」とレーザー加工を見つけたり、

それまで蔵の前にあった渡り廊下をえいやっと撤去し、前面を黒御影石で敷き詰めたりで、職人さんもこうした情熱にほだされ、きれいな仕上がりになり、一時は千住で新しい蔵を建てているとまで評判になっていました。

年秋のイベントにおける試み 「縁+ネットワーク」①

文／佐々木誠



千住ネットワーク／千住・町・元気・探険隊：千住秋のイベントマップ+千住・蔵の町ウォーカラリーマップ 千住の秋のイベント情報を一つの紙面にまとめて示そうという試み

川と川にはまれ歩くのに大きすぎない千住で、まちに積極的に関わろうという様々な活動を、バラバラのままにせず何らかのカタチでつなげたい。そんな想いを抱きつつ、まちの「縁」とその拡張について連続で取り上げていく。今回は、昨年秋に千住で行われた複数のイベントから、それらの活動を横につなぐ可能性を探る「千住ネットワーク」の試みを中心に紹介する。

地域をベースにイベントをつなげる

近年、商店街や役所主導のイベントや地縁のお祭り以外にも、地域をベースに住民が中心となつた新しいタイプのイベントが各地で見られるようになつた。近くでは谷中周辺の「芸工展」や「アートリンク上野・谷中」、向島周辺の「向島博覧会」などが広く知られている。

千住でも千住・町・元気・探険隊による「オータムアドベンチャーや「まち歩き」(1998)、結による「路上アート展」(1999)などが回数を重ね、地味ながらまちにおける認知度も上がってきている。それ以外にも同時期に個人や少人数のグループによる展示やイベントが行われており、潜在力はとても大きい。千住ネットワークでは、千住で秋に行われる様々なイベントを一枚の紙の上で、まちの人や訪れる人に示すだけでも大きな意味があると考えた。

秋のイベントをマップとカレンダーで示す

「蔵の町ウォーカラリーマップ」に「秋のイベントマップ」

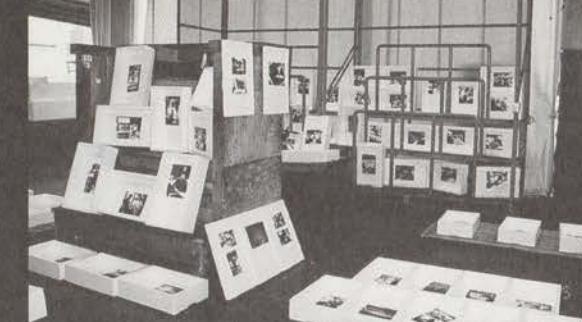
からだいっぱいペインティング（柳原小学校体育館 9/10）廃校が予定される同校の体育館にビニールシートと模造紙を敷き詰め、小学生と一緒に近所のおじさんも全身絵の具まみれになった



ストフラー妙子：トールペイントワークショップ
(足立市場大ものせり場 10/6・7)
マグロをのせる木製のスノコを重ねて作業台にし、
参加者は木の板や茶筒などに自由にペイントした



写真館グループ：写真展・やっちゃんの一日
(足立市場大ものせり場 10/5-8)
魚を入れる発泡スチロールの箱に水をはり、写真を浮かべて展示了。
小学生による「写真展・子供たちのまなざし」も同時開催



を重ね合わせたもので、イベント情報には祭りやエキゾチックフェアなど一般的なものを加え、カレンダーで整理することにより情報誌的側面を持たせた。このマップは公益信託あだちまちづくりトラストの助成を得てつくられ、二万五千部をまちの各所（商店店頭や駅など）におくなどで無料配布した。

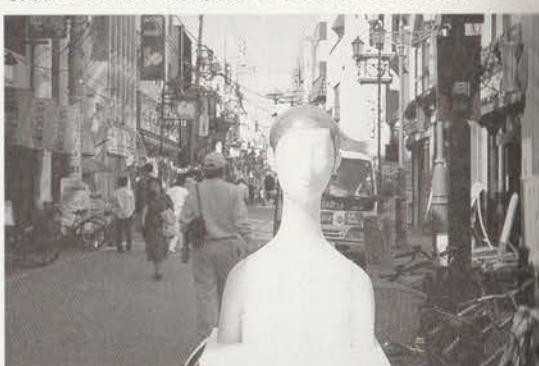
多様な自主イベント

九月初旬の「路上アート展・結」にはじまり、「エキゾチックフェア」などイベントが集中する十月初旬を経て、十月下旬の「千住・まちの風景展Ⅱ」まで約1ヶ月半の間に、関連するものを含めると二十を越えるイベントが行われた。住民中心の自主イベントはアート系が多く、路上、神社の境内、足立市場、空店舗、蔵、喫茶店、長屋など、他用途の既存空間を活用したものが大半を占めた。それ以外では、参加者を募るワークショップ、まち歩き、手づくりアート作品のフリーマーケットなども行われ、カタにはまらない多様なイベントが実現している。ただ、谷中や向島のように個々の活動を何らかのカタチで結びつける事務局機能があれば、よりまちにアピールできたのではないかと感じた。

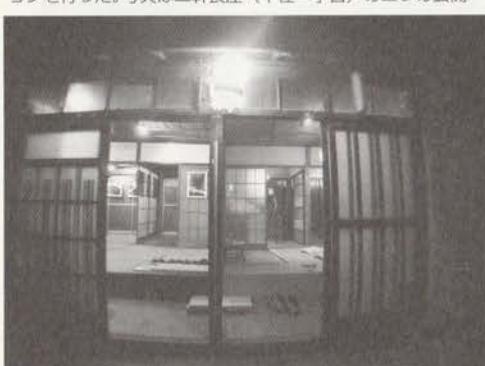
千住エコロジーネットワーク

地域における活動をつなげようという秋の一つの試みを経て、「ネットワーク」をキーワードに様々な活動を行うことを意図し、その後「千住エコロジーネットワーク」というグループを結成した。ここでの「エコロジー」は、「地域における人のつながり」(=生態系)を意味する。そして、地域をベースにまちの資産を生かし、住民と一緒につながって行う博物館活動である「エコミュージアム」を実現するための下地づくりを目指している。

わかば堂：ギャラリー・大沢瑞紀展（チャレンジショップ 9月下旬）
豊の展示空間は、芸大生など若手芸術家たちとの交流の場となった
写真はプラスチックの彫刻作品（チャレンジショップ前にて）



tokyo mush:千住まちの風景展Ⅱ（二軒長屋、なかだ蔵10/14-21）
千住の古い建物の中で、写真・水彩画・音の展示・インスタレーションを行った。写真は二軒長屋（千住一丁目）の二つの玄関



千住蔵研究会:蔵の博物館PART4（千住歴史ブチテラス 10/4-14）
駅前再開発で解体されたレンガ蔵・大谷石蔵の古材や実測図面、模型などの展示により、研究会の活動を発表した



新井英夫＆クリストファー・遥盟：尺八とダンス「そらけ／空気—千住篇」
(千住本氷川神社 9/23) 神社の境内を舞台に、観客も一体となった不思議な空間をつくりあげた。この他、喫茶「蔵」でも公演



千住にある23の町の歴史や暮らしを見発見するページです。

柳原の運連からスタートします。
取材・文イラスト／大倉いすほ

新・千住²人スケッチ①

千住に移り住んできた新住人たちの住まい方、視点を通して、千住の魅力を探るページです。初回はわたし自身の住まい方をご紹介します。

イラスト・文／鳥山暁子

木造2階建ての一軒家

千住五丁目、生涯学習センターのすぐ近く。昔のままの街路が残り、住宅が密集しているところ。家賃は85000円。

2001年春から二人暮らしです

★とりやま：age23女。野田に通う大学院生。建築を勉強している。実家は茨城県つくば市。大学と現在修士設計を行っているつくば、都内で活動をするときの拠点である千住の家を行ったり来たりしている不規則な暮らし。

★くろさわ：age23女。お茶の水で研究している大学院生。応用生物学を専攻。実家は神奈川県横浜市。平日は千住の家からお茶の水の研究室に通い研究活動を行っている。朝早く夜は遅いが、ちゃんと自炊をこなしている。

勢いで千住にやって来た！

★とりやま：2000年の冬、初見教授の紹介で歩いた千住のまちがすっかり好きになり、友人

達と共に場を借り、研究室の千住支部をつくろうと計画。卒業設計では千住での自分達の暮らし方をイメージした作品を発表。この計画自体は実現しなかったが、夢は捨てきれず、2001年春から勢いで千住に暮らし始める。

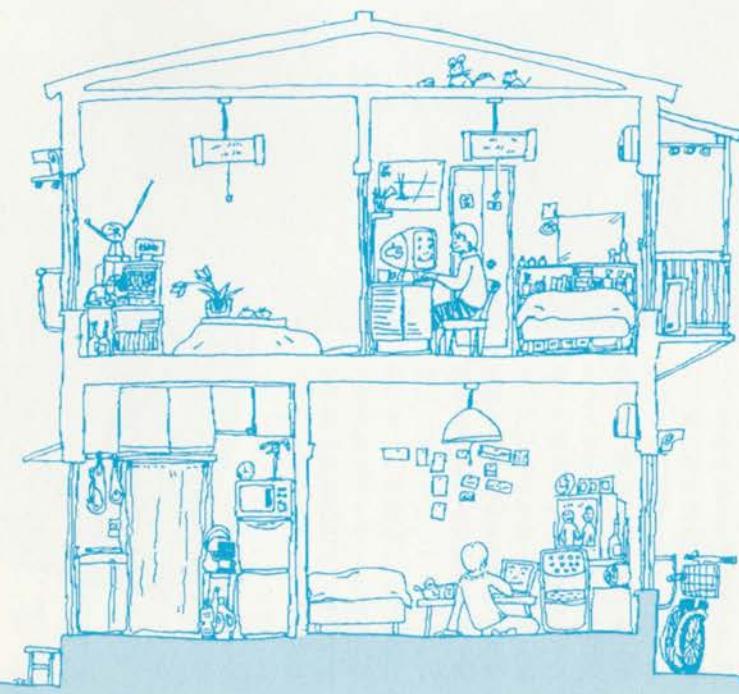
★くろさわ：横浜の実家から野田の大学へ通い続けて4年間。大学院に進学するのをきっかけに、家を出ようと考えていたところ、とりやまに誘われ、こちらもほとんど勢いで承諾。戸建まいもひとり暮らしも生まれて始めての体験で、わくわく。

千住暮らしは面白い！

駅から家までの途中に商店街で買い物ができるので、自炊をするようになった。毎日違う道を使って駅まで行くのが面白い。飲み屋さん等の飲食店が充実しているし、都心部で遅くまで飲んでもちゃんと帰れることも魅力的。とりやまの研究室では今まで野田や柏で行っていた飲み会を積極的に千住で行うようになった。共用の無目的な部屋があるので、急に終電に乗り遅れた人が来たときも対応できる。戸

建の家の悪い点は、集合住宅に比べ寒いこと。家同士がとても密集して建っているので、昼間でもなかなか1階までは日が当たらないのは千住ならではか。

今後のことまだわからないが、千住はとても住み心地が良いので、可能であれば今の家に暮らし続けたい。最近は周りの同世代の若者達の中にも千住に住みはじめる人が増えてきました。千住の魅力や私たちの暮らし方に共感を持ってもらっているのならとても嬉しいです。



ヒロアヤコ



大根ときゅうりのぬか漬けがうまい。ひんやりとして浅くも辛くもない絶妙な味わいは、やめられないともならないまさ。三浦さんのぬかごは、柳原に嫁入りした頃からずっと守られてきた。大きな水がめにたんまりと入ったぬかをかき混ぜると、三浦さんの腕はすっぽりと埋まってしまう。この水がめ、今から49年前はバケツに3杯もの水が入る大切な水源だった。

三浦さんは茨城の土浦で育ち、女学校に通った後、農業である農業を手伝っていた。昭和28年に銀行員の柳治さんと結婚し、柳原に来たのが22才。「東京なら何でも揃つていいだろうって親戚は思つてたみたいだけどさ」当時は料理をするにも台所の軒下の釜に薪をくべて火を起こし、洗濯はたらいて洗濯板を使つた。洗い場の横には水がめを置き、柄杓で汲んで生活用水とした。水がめが空になれば共同水場まで汲みに行く。

「水道の蛇口の鍵を皆持つてね、誰かが鍵を忘れてつた時なんかは鍵に付け

た飾りで持ち主がわかるんだよ」。11軒で一つの共同水場を使うために、いつも混んでいた柳原の路地風景になぜか心惹かれる。柳原のぬかごは山積みになつて歩きづらく、雨が降れば雨どいがなかつたために屋根をつた路地に落ちる雨で体がずぶ濡れになつた。下水はと言えば、木の板を並べて土に差し込んで溝を作つただけのもの。汲み取りトイレスは町会から汲み取り券が配られ、汲み取り屋がバケツを肩にかついて車まで運んだ。

そんな生活環境のなか、区道から私道へ水道の引き込みをする話が持ち上がり、工事の手続を行わなければならなかつた。「三浦さんはこのうしたこと好きだからつて面倒なことでは任されちゃうんだよ。でも私もやるからには頑張つちやうたちだからね」。上水道は共同水場を共有していた11軒の協力で進める一方で、下水道は区道に挟まれた一本の路地に並ぶすべての家の承諾を得ねばならなかつた。「女手だけで何もわかりませんから教えてください」と水道局の指導を受けながら一つの段階を踏んでいった。私道への引き込み管の費用は個人負担だつたため、金額が家によって不平等にならないように配慮したり、便さの改善よりも出費を気にする人を説得したりするのは、なかなか骨の折れる仕事だった。こうした努力の結果、三浦さん宅付近の上水道は昭和33年、下水道は昭和46年に完成した。「昔は、土浦の実家から涙ながらに柳原に帰ってきたけど、今ではすっかり居心地良くなつちやつてね、帰つてくるとほつとするよ」。そこに住む人の努力の積み重なりで町は住みやすくなつて行く。柳原の路地風景になぜか心惹かれるのは、三浦さんのような人々の手と心がたんねんに作り上げてあるからなのだ、という気がした。



柳原のぬかご



浦さんはこういうこと好きだからつて面倒なことでは任されちゃうんだよ。でも私もやるからには頑張つちやうたちだからね。

浦さん

1976年小平生まれ。東京芸大在学中の1999年～2002年の3年間、千住の町を舞台とした路上アート展を主催。2001年には柳原に住み、柳原で開催した。

菅谷英一 18

Sugaya Eichi, 18 years old

写真・文／轟又将文



ダンスやスポーツというものは、その種目ごとに、それぞれの重力をプレイヤーの身体に宿す。荒川の土手に立った彼は、春の日差しを受けて立ち上つて行く蒸気とともに浮かんでいるかのように見えた。菅谷くんは、ミュージカルの舞台照明を太陽とし、観客のまなざしとともに立ち上つていこうとする若者だ。その人生の3分の2を、重力とかかわってきた。

6歳の頃、母親が応募したテレビ番組「スタミナ天国」の「踊れる子大募集」に出演したこときっかけに、何度かテレビに出た後、8歳の時にミュージカルの舞台に立つ。初演だった「ファミリーミュージカル『秘密の花園』からミュージカルが好きになつた」という。以後20作以上舞台を経験して来た。はじ

まりは親の押し付けだったが始めたその時から今までずっと楽しさが続いていて、楽しさがブレたことがない」という。そういう、誰もが知る楽しい時の軽快感、それが彼の内面から外側に広がり今の菅谷英一を作つているのだと思う。

彼が今夢見ていることは、舞台、或いは映像の中で「子どもたちと何かをやりたい」ということ。筆者は、彼は自分のことをよく分かつてている人だと感じた。何故なら彼の夢を聞いたとき、即座に子どもたちの輪の中で踊る彼の姿がイメージできたから。菅谷くんの楽しさが、輪の中の子どもたち一人一人に伝わり、一つの風船のようにふくらんで行く様子を。

8月26日から28日、亀有りりオホールで公演される郡司行雄氏プロデュース「プレゼント(仮題)」で、初めて主役として舞台に立つ。楽しさに包まれた彼の身体が軽やかに表現するものが何なのかを見に行きたい。

■プロフィール／たてまたまさふみ 岩手県生まれ。写真学校卒業後、大手出版社スタジオ勤務。その後、東京を撮りたいという思いからタクシー運転手を経て、現在は世界の都市まちなかに生きる「人」を撮る。

韓国ラーメン【韓韓麺】

場所 ■ 北千住駅西口より徒歩3分のあたり
飲み横から路地を入ったところ

営業 ■ 午後6時～30分午前1時～00分(日・祝定休)



韓国ラーメン
韓韓麺 なかだえり



ドーピングサワー ¥500
にごり酒をサワーで割ります



業時間もだいたいこのくらいかなって
言うあたりが、なんとなく心地いい。
でも料理はピリッと刺激的。どれもお
酒のつまみにピッタリ。

韓国ラーメン。これが店の名前な
どどうかはつきりしないところや、營
業時間もだいたいこのくらいかなって
言うあたりが、なんとなく心地いい。
でも料理はピリッと刺激的。どれもお
酒のつまみにピッタリ。

まず注文するのは「レバ刺し」と
「ドブロクサワー」。レバ刺しにはちよ
つとうるさい私も大満足の新鮮で濃厚
な一切れは、ごま油と塩をつけてつま
むと口の中でとろり溶ける。そして
ドブロクサワーでスッとのどを潤す。
濁り酒をレモンサワーで割ったほんの
りとした甘酸っぱさは、ビール党や甘
いお酒が苦手な人、女性にも飲みやす
く、何杯でもいい感じ。思わずおか
わりっ！ その後は何だかわからない
韓国名の料理を店の人間に聞きながら果
敢にチャレンジするが、どれもこれも
いける。でも締めの一品に選ぶのは
やはり看板にある韓国ラーメン。韓國
細麺、韓国太麺、中華麺の3種類の麺
から選べ、おすすめはモチつと弾力の
ある歯ごたえの韓国細麺。日本の麺に
はないこの食感が、ちょっと癖のある特
製スープと絶妙に絡み合い、あつ、ま
た食べたいという気にさせる。

料理は清潔な厨房で次々と実に手際
よく作られ、見ているだけで爽快な気
分にさえなる。テーブルの2階席ある
が、私は絶対に1階のカウンターで
この手さばきを楽しむ。混んでいて入
れないこともあるけど、通っているう
ちに何となくタイミングがわかつてく
る。

東京市十五区・ 近傍34町村 地図

復刻



32 南足立郡千住町・
北豊島郡南千住町全図を
本誌2~3ページで使用

〈一地域〉本体価格 ¥2,000

明治40年代に東京郵便局、東京通信管理局
によってつくられた5000分の1地図です。郵便配達を円滑に行うために作成され
た詳細な地図は、東京の町々の歴史をたど
る的確な羅針盤となるばかりでなく、美し
い町割の描写はインテリアにも最適。

このほか各種古地図を
豊富に取り揃えています。
お近くの書店にてお求めください。

(株)人文社
03-3263-3603

■プロフィール／なかだえり 1974年岩手県生まれ。およそ19年前
に建てられたといわれる千住の「蔵」をアトリエとし、フリーランス
でイラスト、執筆、建築設計など多分野で活動中。食と酒に飽くなき
探求心を持つ。http://www17.u-page.so-net.ne.jp/bd5/nakada/

Connaissance de Ceylan

スリランカへのご旅行の
企画・ホテル手配

見たことない
世界が広がる
神秘の国スリランカを
訪れてみませんか？

コネサンス・ド・セイロン社は
おひとりおひとりのご希望に添った
さまざまな旅の形を提案します。

現地スタッフが心を込めて
日本の皆さまの心に残る旅
コーディネートします。

コネサンス・ド・セイロン社
(本社スリランカ・コロンボ市)
URL www.connaissanceceylan.com
E-mail cdctrv@shlk.jp
Tel 94-1-698-346

日本でのご質問・ご用命は下記代理店まで

西武トラベル(株)
担当者 青木伸行
105-8433 東京都港区西新橋2-16-9
Tel 03-3459-8186
Fax 03-3435-8046



魚売りと魚を買う客たちと猫



ココナツ売り（中の果汁を飲む。この果肉は食べない）

都であるコロンボに移っていた。その頃から城壁のある旧市街は大きな変貌を遂げずに残り、今では「世界遺産」となっている。長い戦争状態があつたが、今年2月、スリランカ政府と北部反政府武装組織は停戦同意書に調印し、

ゴールの下町をたっぷり体験しようと思うなら、日の出前に起きなければならぬ。ゴールの一日はインド洋に日が昇る30分前に始まる。それは、旧市街の住人たちが、300年を経た城壁の上で散歩を始める時間である。まもなく水平線の上に太陽が姿を見せ始め

そんな猫たちの姿は、千住もゴールもまったく同じ。：

ゴールの下町をたっぷり体験しようと思うなら、日の出前に起きなければならぬ。ゴールの一日はインド洋に日が昇る30分前に始まる。それは、旧市街の住人たちが、300年を経た城壁の上で散歩を始める時間である。まもなく水平線の上に太陽が姿を見せ始め

ゴール

GALLE/スリランカ

文・写真: Kent Dahl



2、3年前までは、自転車で千住の町を行商して回る魚売りの姿を見かけた。彼は早朝、千住大橋のたもとにあら魚市場で魚を仕入れ、町に売りに出た。今、人々は店やスーパー・マーケットで魚を買うようになり、また工場や商店を経営する人が減り勤めに出る人が増えたため、家で魚売りを待つ人も少なくなった。

スリランカの港町ゴールでは、300年以上の歴史をもつ旧市街の下町で、今も魚売りに見える。古い城壁間に閉まれた旧市街東端の小さな漁港に、魚売りたちが毎朝集まる。漁師たちの小舟が到着するや、魚売りたちは競って魚を仕入れ、自転車の荷台の木箱に積み込んで、町にこぎ出す。町ではいつもお客たちがいつもの時間、家の前に出て魚売りを待っている。そして魚売りが注文の魚をまな板の上でさばくのを、何匹もの猫たちがじっと見つめ待ちかまえ、そのおこぼれに群がる。

そんな猫たちの姿は、千住もゴールもまったく同じ。：

ゴールの下町をたっぷり体験しようと思うなら、日の出前に起きなければならぬ。ゴールの一日はインド洋に日が昇る30分前に始まる。それは、旧市街の住人たちが、300年を経た城壁の上で散歩を始める時間である。まもなく水平線の上に太陽が姿を見せ始め

る。6時半頃、空いっぱいに淡いピンクやブルーの絵の具で染められたような劇的な色彩スペクタクルが練り広げられる。この時間には、魚売りや多くの物売りたちが町に出てくるのだ。パン売りは、小さなショーケースを載せた紫色の三輪車で町をまわる。キャンディ売りは、小さな容器に赤い棒付キャンディをいっぱい入れて、ココナッツ売りは黄金色のココナッツをいくつも自転車にくくりつけて路地をゆっくり走りまわる。物売りたちはそれぞれ異なる手製の鈴やベルを鳴らして客を引き寄せる。

300年の時を経た城壁の町「ゴール」は、スリランカの最南端に位置する。この町を最初に作り上げたのは、ポルトガル艦隊の難破船でたどり着いたボルトガル人たちであった。暴風雨で打ち寄せられた浜辺で、一番鶏が声をあげて鳴いているのが最初に聞こえてきたので、ポルトガル語で「雄鶏の鳴き声」を意味する「ガロー」が転じて町の名「ゴール」となった。1640年にオランダがやって来るまで、ボルトガル人はここで宝石とスペイスの売買取引をしていた。この地域を取り囲む城壁や古い家々の一部は、この頃造られたものである。1796年にイギリスがスリランカを植民地化したときは、商業的な関心は、すでに現在の首

■プロフィール／ケント・ダール デンマーク、コペンハーゲン生まれ。1980年初来日時、千住を訪れ、1986年より千住在住。現在はジャーナリストとして、日本を拠点に、アジアの記事をデンマーク向けに発信している。

旅行者にとっても治安面における不安はほとんどなくなつた。

千住応援会員になつて！ その1

町雑誌千住は、千住・町・元気・探険隊が母体となって発行されていますが、現在皆さんのご厚意とメンバーの出資とボランティアによって成り立っています。千住を愛する皆さんにも、ぜひ応援参加していただきたいのです。

- 購読応援会員 年会費3千円以上（各2冊3回配本・送料、手数料込み）
- となり組応援会員 年会費6千円以上（各4冊3回配本・送料、手数料込み）
- 心意気応援会員 年会費1万円以上（各5冊3回配本・送料、手数料込み）
- 法人会員 年会費3万円以上（各10冊3回配本・送料、手数料込み）

心意気応援会員は紙面でお名前を、法人会員は社名他をご紹介させていただきます。

● 2口以上のご協力、500円からのカンパも大歓迎

会員になっていただける方はお近くの郵便局から下記までご入金ください。入金確認次第、会員登録させていただきます。名前、郵便番号、住所、電話番号のご記入を正確にお願いします。

【郵便振替口座】00140-4-103836（町雑誌千住編集室）

会員になってくださった皆様ありがとうございます

青柿浩一郎	足立区観光協会	足立立教会	あやめ寿司本店	石原 捷恵	一 初
上木 恵子	植蔭 徹	うなぎ千寿	(有)裏方家多聞堂	奥津 麗子	奥乃丸伸之助
鯨岡 亘	久保田生花店	倉元 恒一	栗田田鶴子	喫茶 蔵	小室 凱充
金蔵寺	佐藤 真澄	佐藤 昭司	三忠本店	塩島 莞爾	清水 正雄
篠宮 勲	白土 徳一	新日本百年茶	鈴木 利次	須藤 尚俊	スペースエイド
千住ファーマシー	千住本氷川神社	高見澤康夫	鳥 真	虎谷 恒子	中島 勝正
野田 征子	奇席ベガサス 人形劇	星野 明	堀内 延浩	柳原ほん太	松田季美子
マツマル	松本 龍子	水庭 康夫	緑町町会有志	宮田 昭明	宮田 一男
お好焼文字屋	酒のモトハラ	山田東城京	吉田 忠司	よしだ や	若林登紀子

（敬称略）

カンパをしてくださった皆様ありがとうございました

情報をくださった皆さん、本誌にご登場いただいた皆さん、

ご協力ありがとうございました！多くの皆さんのお力を借りました。

写真・情報提供他、ご協力ありがとうございました！

荒川知水資料館、足立区荒川ビジターセンター、足立区立郷土博物館、安藤義雄、大塚甚三
シマカワコウジ、武居厚志、八木幸治、八木茂、柳下勉、横山佐吉
（敬称略・50音順）

千住応援広告を募集しています（P25、27参照）。
お問い合わせは090-1267-7389（担当山崎）または3870-7055（千住・町・元気・探険隊）まで。



千住最中本舗

⑫ (3882-4147)
千住竜田町本店・五反野店
竹の塚店・北千住ルミネ1階
梅島駅前店・花畠店

コミック3万冊ゆったり80席
まんが喫茶
営業時間 平日AM10:00~PM11:00
日祭日AM10:00~PM10:00
TEL 03-3879-7532
イトヨコ堂となり柏光ビル4F

槍かけ松最中

千住 すかせん
電話 (3882)10011002
北千住駅東口前

旭町歯科医院
ASAHI-CHO DENTAL CLINIC
TEL 3888-3917
北千住駅東口
足立区千住旭町4-10

町雑誌 千住

- VOL. 1 千住の祭
- VOL. 2 銭湯めぐり
- VOL. 3 飲み処食べ処
- VOL. 4 千住宿を遊ぼう
- VOL. 5 千住の餅菓子屋
- VOL. 6 映画文学の舞台となった千住
- VOL. 7 映画文学の舞台となった千住
- VOL. 8 千住手仕事職人の世界 前編
千住手仕事職人の世界後編
- VOL. 9 千住の年中行事
- VOL. 10 ネコの眼路地歩き
千住の年中行事
- VOL. 11 千住の年中行事
- VOL. 12 千住の市場

バックナンバー販売店

- アサヒ書店
- 笠間産業
- 仁寿堂薬局
- ぶっくらんど
- ブックスくまくら
- 渡辺優文堂
- 北嶋書店
- 高原書店
- 丸善らがある北千住ルミネ店
- 書肆アクセス（神保町）
- 書林梅島店
- 好文堂書店（梅島）

お願い！その2 ●スタッフを募集します！ボランティアスタッフです

が、面白そうと思う方、ご連絡ください。特に身軽に動いてもらえる人好きなスタッフを募集しています。▼取材にまわれる方▼写真を撮れる方▼MAC（オーケー）ユーザーで版下作業をしていただける方▼宛名書き配送などの出来る方▼配達できる方などなど…

●千住の面白いヒト、もの、こと、募集します！なんでも、千住の情報を教えてください。お手紙、FAX、お電話などでよろしくお願いします。

町雑誌千住はここで買えます！

●千住旭町／アサヒ書店 旭町歯科医院 喜田家ルミネ店 とんかつもりき 丸善ら・がある よしだや ●千住東町／ヘルソーリンピラ ●柳原／ゑびす屋 ●千住一丁目／泉屋本店 喫茶藏 コバゲーデン 銀座精肉店 焼かつくり 椿屋 日の出屋 前田クリーニング店 山本園 ゆうらいく ●千住二丁目／柏屋 五味鳥 千住の永見 ぶくらんど 洋品ハセ ジーンズマルオカ末興志商事 三河屋 ●千住三丁目／一番 珈琲物語 メンズギャラリー福田 渡辺優文堂 ●千住四丁目／五門 酒の花栗屋 ●千住五丁目／梅の湯 ラ・ルミエール ●千住大川町／ホシノ理容室 山口書店 ●千住寿町／大黒湯 ●千住元町／佐原治泉 タカラ湯 モカ ●千住桜木町／洪谷歯科医院 穂高 ●千住柳町／キッキンアントレ 一富士 一やなぎ 金乃湯 ニコニコ湯 ●千住電田町／アリス 大戸屋食堂 喜田家本店 大衆割烹 つばめ 富井煎餅 インテリアホシノ工芸 ●千住中居町／北嶋書店 コロド ●千住宮元町／居酒屋せきね 高原書店 萬谷整骨院 ●千住仲町／小桜湯 まじ満 ●千住河原町／不動産のカサマ プチテラス ●千住橋戸町／仁寿堂薬局 德田屋食堂 や満ざき ●千住縁町／魚源 オリーブ サロンドドウル しづか屋 中村屋 バレット 丸安青果店 ●千住外／書肆アクセス 喜田家花畠店 喜田家五反野店 喜田家竹の塚店 喜田家梅島店 書林梅島店 富士ブックス 小泉書店 ブックステーション小泉 ブックスひでき ●この他にもあります。お問い合わせください。●町雑誌千住をおいてくださるお店を募集します！ご協力いただけるお店はご連絡ください。

お楽しみに！
ごくらくランチ
次号（VOL.14）
特集は…
特集は変更することもあります。
ご了承ください。

あなたのお気に入りのランチ情報を教えてください。採用させていただいた方に
は町雑誌特製絵ハガキをプレゼント！

（F）

いよいよ毎日共催のワールドカップがやってきます。日本にやつてくる多くの外国人サポーターの方たちにとって、試合の感動はもちろんのこと、日本のよさもたくさん記憶に残りますよ。（か） ●前々からしてみたいと思っていたイラストと文、しかも大きくなづルメの取材は楽しつけている甲斐がありました。（ななだ） ●「千住」に関わってはや4年近くになりますが、荒川放水路にちゃんと行ったのは今回が初めて。こんなにおもしろい川、もっと詳しく述べてやる！ 第2弾を待て！（川上佳子） ●二年前 テレビで東京キッドブラザーズの主宰者であった、東由多加の葬儀を見た。そこで二十年前、僕を熱くしてくれた俳優たちが、当時のミュージカルナンバーを歌っていた。僕も一緒に歌った。僕は今も、彼の作品の中のナンバーを30曲以上口遊める。（中谷） 千住に暮らし始めた1年たしましたが毎日楽しい発見があり、飽きるということはありません。この大きな町を私が紹介できるなんてうれしい限りです。これからも楽しく紹介できたらなと思います。（トリヤマアキコ） ●とりあえず13号です。表のページはつづきます。今後もよろしく御愛読下さい（あ） ●駅まで10分、銭湯まで5分、荒川まで1分。もっと行きたいなあ。（藤井） 今号から少し編集方針をえてみました。特に後半。面白くなつたのでは、思つているのです。面白くなつたのがでしゃう。前号から少し間があきましたが、町雑誌制作はあわただしいながら楽しんでいます。あわただしさの被害を被つたYくん、ごめん。（F）

「町雑誌千住」創刊以来、読者の方々からたくさんのお便りをいただきました。これからも貴重なご意見ご感想、おもしろい情報などお待ちしております。みなさまと一緒に楽しい紙面をつくりていけるようがんばります!



「北千住駅」を「千住駅」に…

はじめまして。私は結婚をするまで横浜市以外に住んだことがなく、北千住駅という駅名は聞いたことはあったけれども、その駅が果たして都内なのか埼玉県なのかもよくわからず、その語感イメージから、さびれた地方都市、という先入観を持っておりました。まちの歴史などもまったく知りませんでした。

平成8年に千住4丁目生まれの妻と結婚し、千住寿町に居を構え生活を始めると、さまざまなことがわかってきました。この町に住む人達はこの町を「せんじゅ」と呼び、この町で生れた人達は、自分達のことを誇りを持って「せんじゅっ子」「せんじっ子」と呼んでいます。最初のうちは「きたせんじゅ」を略しているものと思っていましたが、それは間違いであるとすぐ気付きました。住所を見ると、千住〇丁目、千住寿町、千住中居町など、すべて「千住〇〇町」という表記であり、「北千住」がつく町名はまったくありません。又、警察は「千住警察」、消防署は「千住消防署」小学校は「千住〇〇小学校」…というふうに公共機関もすべて「せんじゅ」を使っています。さらに一般企業や銀行もほとんど〇〇社千住支店です。すなわち「北千住」という名前があるのは「駅名だけ」という事実です。

江戸時代には日光街道の重要な宿場町「千住宿」だったこの町に暮らすものにとって「せんじゅ」という名は、誇りと愛情を持って呼んでいる名であることをひしひしと感じます。

「北」という言葉にはあまり明るいイメージがありません。三省堂の「例解・新漢和辞典」で調べてみると、「北」という漢字は、2人の人が互いに背に向いている象形から来ているそうです。負けて逃げ出すのが「敗北」という言葉です。最近ではビートたけしが事あるごとに「キタセンジュ」で笑いをとっています。「キタセンジュ」には残念ながら「やや落ちる」音感が宿っています。

その昔、会津の「喜多方」は「北方」と書いたそうですが、あまりにイメージが寒々しいということで今の字に変えた結果、ラーメンと蔵の街として、多くの人が訪れるようになったことは周知のことだと思います。

駅名変更は各地で頻繁に行われているので、問題はないと思われます。「北千住駅」は「千住駅」にするべきです。町雑誌千住は「千住」であって「北千住」では間違いなのです。駅前再開発も始まり、数年後には常磐新線が開通し、さらにターミナル駅として発展し続けながらも、歴史と伝統を感じさせる千住の町の中心に位置する駅名として、一番ふさわしいのは「千住」です。駅名変更によってプラスはあってもマイナスは見つかりません。

(千住東在住 T・H・Sさん)

町雑誌「千住」 VOL.13 2002年 5月発行

発行 千住・町元気探険隊 ☎120-0044 定立区千住緑町2-33-23 TEL 03-3870-7055

編集 町雑誌千住編集室 ☎120-0034 定立区千住3-52 TEL & FAX 03-5244-2158

編集人 大野順子 舟橋左斗子

STAFF 取材・原稿／荒居康明 大倉いづほ 金澤昌代 川上佳子 ケント・ダール 佐々木誠 烏山暁子

なかだれり 藤井紀章 写真／館又将文 特別協力／石坂満 舟橋雅子 デザイン協力／渡辺あつ子

鈴木玲子 イラスト／大倉いづほ 岡本杏子 MOMO 協力／ 大江明俊 大野清士 山崎正樹